

底生動物の特徴

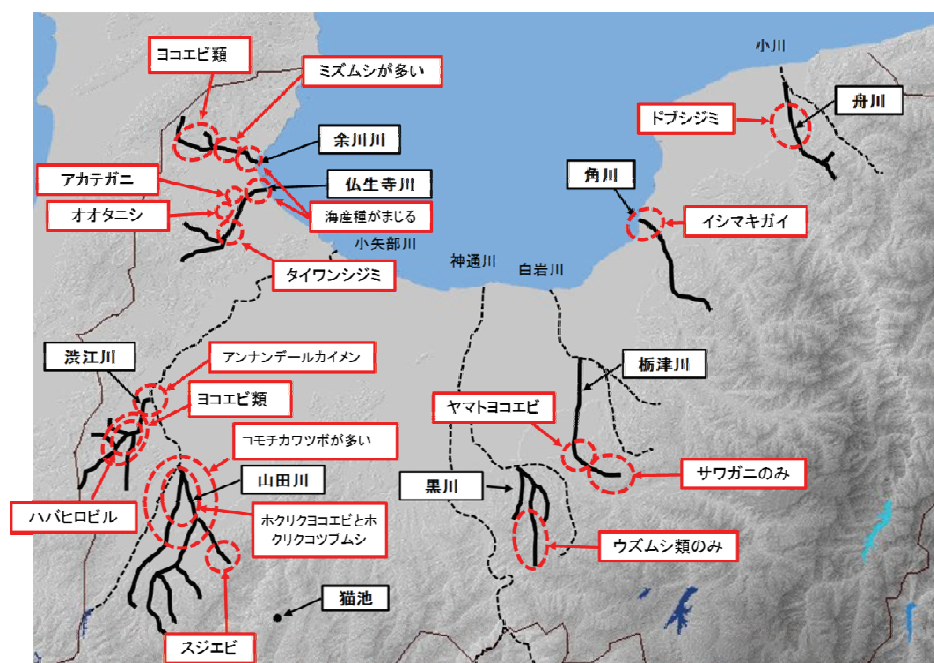


図1 各河川に出現した主な底生動物

今回の8河川の調査と、富山県などが実施してきた、庄川、黒部川、小矢部川流域地区の生態系調査の結果を合わせると、富山県中小河川の昆虫を除く大型底生動物の傾向が判明してきた。調査結果の大筋で言えることは富山県の河川は全体として急流の傾向が強く、特に東部の河川や庄川水系でその傾向が顕著であることである。個体数ではカワニナ、サカマキガイ、シマイシビルなどの非吸血ヒル類が最も多く、ついで甲殻類のミズムシが多く見られた。また、清冽な水域からはウズムシ（プラナリア）、ヨコエビ類が多く見られた。

富山平野には多くの河川が形成した扇状地があり、そこには湧水帯が多く、きれいな水にすむ底生動物が見られた。富山県西部の小矢部川水系や氷見の川は比較的緩やかな流れが多かった。湧水起源の水環境が多く、ヨコエビ類が多く見られた。そのほか、急流のため動物が上流から流されてかなり下流で見られることもある。多くの河川でサカマキガイが多く見られたが、本種は一般的に汚染の指標種とされるものの、県内ではきれいな水質でも見られることがある。

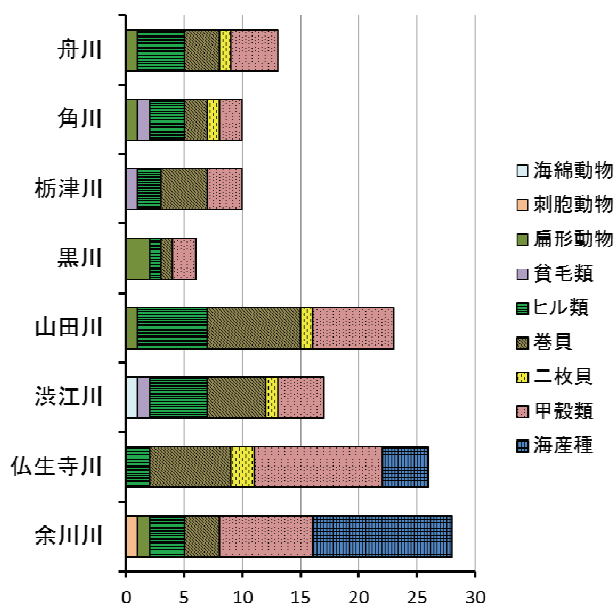


図2 8河川で確認された底生動物の個体数



サカマキガイ
(県内ではきれいな水にも生息する)



ホクリクコツブムシ
(海産種の陸封か?)



カワナ
(県内で最もめだつ巻貝)



ホクリクヨコエビ
(扇状地の湧水に多い)



シマイシビル
(最も多い非吸血ヒル)

調査した河川と深く関係している農業用水、排水が非常に多く、その影響も大きい。水田率の高い富山平野では農業用水の水量の人為的な調整が行なわれており、これらの河川は干上がることもあるため、まとまった水量が必要な種類が生息できない。

ホクリクコツブムシが小矢部川水系など県西部で見られることは特徴的である。この種は氷期の日本海が淡水湖かそれに近い状況であったことを示唆し、陸封された種かもしれないとされる。

一方、60年前頃には普通に見られた吸血性のヒルであるチスイビルは全く確認できず、アメリカザリガニやベンケイガニ類もきわめて少なかった。

なお、外来生物法で「要注意外来生物」に指定された外来種のタイワンシジミのグループ（中国南東部、朝鮮半島、台湾などが原産地で複数の種類が混じっている可能性が大きい）が増えてきており、さらに近年、コモチカワツボ（ニュージーランドかオーストラリアを原産地とし、世界各地に広がった）の急速な増加が観察されている。これらの種は環境の変化に強く、繁殖力も強いいため、ますます分布が拡大すると予想される。そのため、在来種と競合し、在来種を駆逐するおそれや、在来種との交雑により遺伝的攪乱の影響を与えることが懸念される。



タイワンシジミ
(近年侵入した外来種)



コモチカワツボ
(近年侵入した外来種)